348
特51
848

663 岩波文庫・教科書版
26

方丈記

山田孝雄校訂

岩波書店

始

特251
848

帝國圖書館藏

岩波文庫・教科書版
26

方丈記

山田孝雄校訂

岩波書店

昭和八・六・五
帝國圖書館

解題

本書は鴨長明が日野山の閑居に於いて自己の感想を述べたるものにして、これによりて、吾人は作者の生活せし時代の狀態と作者の境遇及び性格とを察するを得るなり。

按ずるに作者の時代は天災地變ついで至りし時なるのみならず、歷史上の大轉回期にあたりたれば、社會上に種々の缺陷を生じ、人事の轉變また甚しきものありしなり。されば世の無情を觀じ厭世主義に傾く者の生じ易きはいふを待たず。而して作者はその社會に於いて輕き意味にて

の敗者としての境遇に立てりしものと認めらる。かくの如き内外の種々の事情は作者をして世を遁るるに至らしめしならむ。

作者は佛教の思想に基づきて、無常を觀じ、世を遁れたるものなれど、天を怨むるにもあらず、世を詛ふにもあらず、淡泊に世を離れて閑居し、消極的ながら自己の境地に一種の安慰を見出せり。さればその無常觀も厭世主義も共に徹底せざる觀あり。これ或は日本人が根柢に於いて樂天的なるのいたす所か。要するに本書によりて日本人の性格の消極的方面は或はあらはれたりとすとも積極的方面は恐らくは認め難き所ならむ。

本書は隨筆と稱せらるれども、首尾一貫せる一篇の文にして他の隨筆が斷片的に感想を述べたる小篇の集まりに過ぎざるものと同一に論じうべきものにあらず。而して全篇を通じて些のゆるみなく、讀者をして卷を措くこと能はざらしむるものあるはその手腕の平凡にあらざるを見るに足る。惟ふに本書は長明が、一夕、今を思ひ昔を顧みて、感慨に堪へざるあまり筆を呵して、一氣に草し了りたるものなるべく、その文章に生氣ありて人を動す力に富めるも亦、これが、飣餖補綴の餘に出でしものにあらずして、一氣呵成の文たるが故なるべし。この書を評するもの、よくこの主眼點に眼を着くるを要す。

本書は隨筆中の異彩としてわが文學史上に光を放てるのみならず、その文體も亦わが文學史上重要なる地位を占むるものなり。この文體は所謂和文漢文融和の文體の先驅をなせるものの一として爾後日本の文章の

主なる潮流をなすに至れるものなり。この文體は上述の如く、漢文の特色を和文に混淆調和せる點に存するものなるが、本書の文體はよくこれに成功せるものにして、當時の同一系統に屬すべき海道記東關紀行等の文體に比して優に一頭地を拔けるものあるはこれこの作者の文才の偉大なるによるものといふべし。この文體は蓋し漢文の口調と敍法とを和文に應用したるものなるべきが、それが、生硬にも不調和にも感ぜられず、よく敍述の井然たると理路の明確なると聲調の輕快なるとありて、一言を以ていはば、簡潔の二字を以て評すべきものなり。而してこの特色は主として、漢文の聲調句法を善用したる點に存すといふべく、この特色の存することは、この作者の和漢の文章に精通せる學才が、その文才と

相待つてはじめて功を奏したるによるものなるべし。單に、漢文の故事熟語等を和文に混淆せるに止まる生硬なる文章と同日を以て談ずべからざると共に、本書が一氣呵成して成れる點とを顧みてこの文の古今に希なる名文たる所以をも首肯しうべきなり。

本書の底本

世に說をなすものありて方丈記を僞書とせり。この說の起る端をなすものは蓋し、流布本の末に附する

月かげは入る山のはもつらかりき
たゝぬひかりを見るよしもがな

といふ歌にあるべし。この歌は新勅撰集に載する源季廣の歌にして長明の詠にあらぬは明かなれば、これが、この方丈記と離るべからぬものなりとせば、方丈記は長明の作にあらずといふべきに至るは必然の數なりとす。然れども、この歌の附載なき方丈記少からず。扶桑拾葉集所引の異本これなり、家藏の古寫片假名本これなり、又余等が古典保存會にて複製し、大正十五年四月に國寶に指定せられたる京都府船井郡高原村字下山の大福光寺に藏する古寫本これなり。以上いづれも、この歌の記入なきものなり。又前田侯爵家に藏せらるる室町時代の古寫本にはおなじく、この歌を記載せぬが、卷末二枚許の白紙をおきて空也和讃の一節を記せり。これを以て考ふるに、方丈記を熟讀したる人が、おのづから無常を觀じたるあまりに、上の如き和歌和讃を記入せるものなるべきこと明かなりとす。されば、上述の歌の卷末に存することによりて方丈記を長明の作にあらずと論ずるが如きは、共に古書を談ずるに足らざるものといふべし。

方丈記の長明の作たることは十訓抄の文によりて明かなり。十訓抄が信ぜらるる以上は、その文によりて、方丈記が長明の作たることは否定すべからず。而してその文中に曰はく、

方丈記とてかなにて書置物をみれば、始の詞に行河のながれは絶ずしてしかももとの水にあらずといふ

川閲レ水以成レ川、水滔々而日度。世閲レ人而爲レ世、人冉々而行暮。

（文選）

と云文をかけるよとおぼえていと哀なり。然而彼庵にもおりゝとつぎ琵琶などを伴へり。念佛のひま〳〵には糸竹のすさびをおもひすてざりけるこそ、すきの程いとやさしけれ。

とあり。これを以て方丈記の長明の作たることは否定すべからず。されど、ここに今本は僞作にあらずやと思はしむる材料あり。そは異本と目せらるるもの二種世に傳はるによりてなり。一は故森治藏氏の藏にして後東京帝國大學の藏となりし本にして、これには

寫本者

長享二年戊申十二月十三日於宇多橋西本

願院拭老眼雖爲寒中禿筆手龜鳥跡氷堅依

爲大切寫之者也　　佛子僉源

又次云

于時天文八年己亥正月廿五日於柞原安樂院南窓書之　　隆　忱

又次云

右之本喜多院源春坊隆堅得也寫是之人々五字一類之御廻向奉憑者也

慶長二十年葉月下旬　　寶生院信盛書

とあり。而して森氏の寫本は慶長よりも遙に下れるものにして余は百年をも經過せぬ寫本と見たりしなり。他の一本は東京帝國大學國語研究室に藏したりし本にして、その奥書は

方丈記者是祇翁之所持以長明自筆卷物寫之畢誠筐中之重寶也

延德二年三月上旬　　肖柏判

とあり、これも森本と甲乙なき程の寫本にしていづれもその奥書當時のものにはあらず。而してこの二本共に文章いたく流布の本と異にしてしかも頗る短き文なりとす。加之その二本亦文章異にして全く別種の本と目すべきなり。而してそれらの奥書によるときはいづれも信ずべきに似たりといへども、かの平家物語の大祕事に該當すべき平家物語補闕と名づくる書にて見る如く、南北朝以後往々古書の得がたき場合に何人か之に擬作して、以て自ら得々たる如き弊を見るものなれば、それらの異本も亦、これらの亞流ならずとは必せざるなり。この故に吾人は流布本方丈記の如きものが、決して僞書にあらざるべきは僞書説の勃興せし當時より主張せしものなるが、しかも、積極的に立證せむには、その頃の古寫本を以てすべきものにして、その本の出でざる限りはただ推論を以てするの止むを得ざる弱點存せりしが、幸にして大福光寺本の出現により、流布本の如き方丈記が、長明の原作たりしことを積極的に立證し得られたるなり。

大福光寺本には年代を明記せるものなし。然れども、紙質、書體を以て推すに、長明の時代を降ること遠からぬものたることは否定すべからず。その奥に

右一卷者鴨長明自筆也

従西南院相傳之
寛元二年二月日　　親快證之

とあり。親快は當時の醍醐寺の僧なるが、この識語果して親快の自署なりや否や疑を存すべき點あるものなるが、それが信ずべきものとしてもなほ、この本を長明自筆とするは不當なりとす。何となれば、明かに書寫に基づく誤脱と認むべきもの存すればなり。然りといへども、長明の時を去ること四五十年をも下らざるべき時代の書寫と見ゆれば、今日に於いて方丈記の最も信憑すべき本としては之を措いて他に求むべきにあらざるなり。

さてここに立ちかへり僞作説を見るに、その説を主唱せる張本は故藤

岡作太郎氏なりと認めらるるが、著者が藤岡氏在世の頃主張せしといふ説を當時聞きしものと、その遺著に載するものとは異なる點ありて、遺著の方にはその項目の數減じてあるものなるが、それらにつきては既に内海弘藏氏が、その著方丈記評釋の序説中に論駁せられてあれば、吾人は今更蛇足を加ふる必要を感ぜず。要するに、かの遺著に載する程度の事を以て僞作説の成立するものとせば、世に存する著書の多くは大抵は冠履轉倒の詭辯を弄して僞書と論じ得べきものとならむ。これ蓋し、最初は異常なる見識にて大聲疾呼せしが、漸く反省するにつれて、その説の極端なるを自ら矯めたる如く見ゆるが、なほその僞作説を棄つることの能はずしてかかる薄弱なる論據を固執せしものならむか。ことに藤岡氏

が、流布本の方丈記の文を目して、後人が諸書の一部を飜訳補綴して作成せりといふが如きは、この文章がさる小刀細工になれるものにあらずして一氣呵成の文章たることを認めざる論といふべく、文章の死活を解せざるも甚しといふべし。

次に方丈記を僞作なりといふ論據として、その結構並に文辭全く慶滋保胤の池亭記の模倣なり。この故に僞作なりとする野村八良氏の說あり。この說は一往理有るが如く見ゆれど、かく論ぜむには第一に

長明の文章には方丈記の如き文あるべからず。

といふことを論證せざるべからず。今の世にして何人か長明の文はこの方丈記の如き文なるべきものにあらずといふことを立證しうるものあらむや。吾人が、方丈記を長明の作と認むるは古來の記載傳說に基づくものなり。これを外にして誰人が之を立證しうるものぞ。凡そ古來の傳說、信條を破らむには、動かすべからざる確證を示すにあらずば、誰人か之を信ぜむ。長明はかくの如き文をかくべき人にあらずと信ず。この故にこの文は長明の作にあらずとする如きことをば余が若し論ぜば、余は世人より狂せるかと問はるるに至らむ。次に野村氏は「若し長明が一廉の文章家にして又知者ならんには拙劣なる手段を取ること此の如くならんや」と論ぜり。余は、これが拙劣なる手段なりや否やは今姑く論ぜざるべきが、これも亦長明は必ず一廉の文章家にして知者たるべきことを要求せり　その長明が必ず一廉の文章家にして知者たるべきことは何によ

りて證せらるるべきものか。これ亦野村氏の主觀に止まるのみ。次にこの方丈記の文章をば余は上述の如く古今の名文と信ぜり。野村氏は拙劣なるかにいへり。但しこれはその手段の拙劣なるに止まりて文章の批評にあらずとせば、余は之を論せざるべきが、若し、文章が拙劣なりといふことをも含むものなりとせば、余はその意見には服すること能はざるなり。要するに野村氏は(第一)池亭記により方丈記を書きたりといふことを強く主張し、(第二)これを拙劣なる手段と認め、(第三)長明は大文章家にしてかかる拙劣なる手段をとらざりしものなり。この故に方丈記は僞書なりと主張せらるるものなりと認めらるるものなるが、その第三の點は野村氏の主觀に存することにして吾人の如何ともしうる所にあら

ざれば、今論せざるべきが、第二の拙劣なる手段といふ論に到りては大に論ずべき事あり。

凡そ文學は時世の產物なり。その時世に卽してはじめて、その時世の文學を論ずべきなり。平安朝はた鎌倉時代の文學も亦その時代の思潮に根ざせる所少からず。その時代の思潮を顧みず、大正昭和の思想を以て之を斷ぜば、必ずしも正鵠を得べしと限らざるべし。抑も、この方丈記の成れる頃の文學上の思想、はた一般の思想を顧るに、保元平治の頃よりして新社會の勃興せるものありといへども、なほ大勢は舊時のままにして、故實典故を重んぜし時代なり。而して文學に於いても亦然り。ことにこの頃の漢文學は、前代よりの流弊によりて一言一句典據によらざ

るものなく、新造の言語の如きは決して世に容れられざりしことは歴々として明かなり。この故に當時一文を草し、一章を綴らむとするものは事毎に、典據故實を基とせるものなり。而してこれを有するものは、その文章に權威ありと認められ、然らざるものは、世に顧みられざりしなり。この故に海道記東關紀行の如き生硬の文にても、當時はその故事典故の用ゐられてありしが爲に、世に認められしものなり。かの保元、平治、平家等に和漢の故事先蹤を吾人がうるさく思ふ程に臚列せるものも亦この必要より來りしものなり。若しこれをこれ思はずんばこの時代の文章を理解すること殆ど不可能なるべきものなり。從來の文學史家一人もこの點に想倒せず。否想倒せる人ありしならむが、その著書にはこゝ

に論到せるを見ず。又多くの注釋家も、かの池亭記を方丈記の粉本なりといひし人々も、何が故にかゝる事の生ぜしかを論ずるを見ず。これらはただ外形に拘泥して當時の精神に想到せざるの致す所なり。吾人を以ていはば、この方丈記の文は長明の腦中に存せし池亭記等の記憶が、その文を載せて迸り出でしに止まるものにして、長明が之を模倣せむと殊更に巧みしにあらざるべきなり。然れども、その物に巧まずして、ここに池亭記によりたりと考へらるまでにあらはれたることは、これこの方丈記をして當時の人口に膾炙するに至らしめし一の原因なりといふべきものにして、當時としては拙劣なる手段といはるべきものにあらずして、反對に巧妙なる手段なりといふ點を以て世の喝采を博したりしものたる

べきなり。當時にありて一文一章を出して世に行はれむことを希ふものは故意にもかかる手段を講じたりしなり。かの日蓮上人の第一義諦を主張せし立正安國論を見ずや。その主張は先人未發の論なるべきが、その論文の結構はかの文選の西都賦東都賦等の形式によりしにあらずや。これ日蓮上人の巧妙なる手段にして、先づ、この手段によりて、讀者をして、その初頭に自己の說かむとすることに注意せしむべくせるものなり。又かの身延山御書の如きもこの方丈記の文章によれるものなることは著しきが、藤岡氏はこれをも身延山御書を剽竊して方丈記を僞作せりとはじめには論ぜし筈なるが、後に之を取消したりと見ゆるなり。若し野村氏の如く、かくの如きを拙劣なりとせば平安朝の漢文の如きはすべて拙

劣ならざるものなく、平安朝鎌倉時代の和文の大部分もまた所謂拙劣なる手段によれるものとなるに到らむ。かの慶滋保胤の池亭記の如きも亦その粉本白樂天の池上篇にありて、その骨子をとりて之を潤色敷衍したりしものたることは二者を對照せば明かなるべし。卽ち、吾人が典據ありと目する所は、野村氏の拙劣手段と目せらるる所なるが、余は世上一般の文學史家にこの一點を警告して反省を求めむとするものにしてこの點はただ方丈記につきてのみ論ずるものにあらざるなり。

なほ又方丈記が池亭記によれりといふことの何の恥づべき點なきを吾人は思ふ。先づこの題號を見よ。池亭記と方丈記とその題號に於いてまづ一脈の生氣相通ずるを見よや。其の池亭は池中の亭舍なり、この方丈

は山中の小庵なり。長明の胸中或は最初よりして、池亭記の如きものを和漢混淆の文體によりて記述せむの腹案ありて宿構成りて一夕筆を呵して成りしものこの方丈記にあらずや。果して然らば、池亭記の文脈語勢はた、その成語の散見するはもとより當然にして、これあるが故に長明が卑劣なりとも拙陋たりとも認めらるべき筈なきものにあらずや。長明の方丈記をして全然古來かつてなき獨創の文たらしめざるべからざる必要は蓋しなかるべきなり　この故に吾人は保胤が白樂天の池上篇に暗示を得て、池亭記をつくり、長明はその池亭記に暗示を得て方丈記を作れりとす。而してこれ實に當時の文學思想の大勢かくの如きものを生ぜしめしものなりと思ふ。しかもそれらの時勢の產物として方丈記は好成績

をあげたるものと思惟するなり。

以上論ずる如くなるを以て余はこの大福光寺本の如きを以て方丈記の信ずべき本なりと思惟するにより、ここにこれをとりて、この文庫に收むるものの底本とせり。然れどもなほ多少の誤脫あるによりて、同一系統と目する扶桑拾葉集の異本及び余が藏する慶長若くはその前なるべき片假名古寫本を以てその誤脫を補ひたり。

鴨長明傳

（大日本史卷二百二十五の傳文を譯出し、一二の修補をなす。）

鴨長明は菊太夫と稱す　世〻鴨社の氏人にして祖季繼、父長繼、皆禰宜たり。（鴨氏系圖）長明管絃に通じ、和歌を善くせり。（十訓鈔）應保中從五位下に叙す。（系圖　後鳥羽上皇召して和歌所寄人としたまふ。（十訓鈔）一時の和歌に名ある者に敕して、肥大、枯細、艶雅三體の和歌を獻せしめ以て其の才を試みたまふ　衆皆之を難しとす。唯長明及び攝政良經、僧慈圓等六人敕を奉ず。長明嘗て父祖に襲いで社司に補せられむことを

奏請せしかど許されず。これより鞅々として樂まず、門を杜ぢ、交を息め、葵の歌（見れば、まづいとど涙も、もろかつら、いかに契りてかけはなるらん）を作りて以て其の意を寓す。（新古今和歌集十訓鈔を參取す）髪を剃りて僧となり、名を蓮胤と改め（東鑑）大原山に入る。時に年五十。（方丈記）建暦中鎌倉に往く。將軍源實朝素より其の名を聞きしかば、數〻延接せらる。（東鑑）幾も無くして京師に還り、創意して室を作る。方一丈、高さ七尺に過ぎず。柱極屋廂皆鉤鎖を用ゐ、開闔すべからしむ。或は意に適せざれば、移して以て他に往くに兩車に載すべし。遂に日野の外山に入る。有る所、佛像及び書數軸箏琵琶にして餘は貯蓄する所無し。山に登り水に臨み採擷自ら給す。方丈記を著せり。其の耿介の氣、

其の中に槩見す。世之を傳誦す。（方丈記）後上皇復た召して和歌所に入れむと欲したまふに、長明和歌（沈みにき、今さら和歌の浦浪に、よせばやよらん、あまの捨舟）を上りて之を辭す。（十訓鈔）遺跡は石床有り。世に方丈石と號す。初め藤原俊成千載和歌集を撰進せるとき、長明の歌を採ること僅に一首のみ。長明喜んで曰はく、我れ歌人の後に非ず、身亦才有るに非ず。而して勅撰集中に採錄せらるるは豈に至榮に非ずや。或人曰はく、子の言甚だ理有り。他人は此の如くなること能はじ。吾れ是の集を閲するに庸流多く收載せられ、多き者は十數首、少き者も四五首を下らず。吾以謂へらく、子内に平かなること能はざるなりと初めは子の言を信ぜず。而子屬言措かず、今よりして後子の實に之を喜ぶを知

れり。心を存すること此の如くば、終に斯道に於いて神助を得べきなりと。其の後長明聲譽日に盛にして果して其の言の如し。（無名鈔）新古今和歌集を撰するに當り、一時、和歌を進むる者、多きは千百首に至る。撰人刪り去る者多し。長明唯、十二首を進る。而して皆取る所となると云ふ。（兼載雜談）著す所、瑩玉集、無名鈔、方丈記等ありて、世に行はる。

凡例

一、本文は大福光寺本（國寶）を底本とす。この本に磨滅汚損等によりて文字の明確ならぬものは、扶桑拾葉集の異本及び家藏片假名本によりて補へり。

一、大福光寺本にも誤脫と認むべきもの多少存す。その部分は扶桑拾葉集の異本及び家藏片假名本によりて補へり。

一、大福光寺本、扶桑拾葉集の異本、家藏假名本互に違へる所少しく存す。それらの場合にも本文は主として大福光寺本によりその他は下に

注す。但、大福光寺本明かに誤と認むる場合には正しと認るむものを本文とし、その他を下に注す。

一、以上、三項の場合の注記はすべて脚注の形式として、その首字の行の脚下に注記す。

一、用字は主として大福光寺本により、特別の場合は前四項の例による。而して、傍に漢字又は假名を加へて、その意とよみ方とを注す。この傍書は前出二書によりて可なるものと認めたるを加へたるが、それらになきものは色葉字類抄、類聚名義抄等同時代の書によりて加へたり。

一、假名遣は大福光寺本「ハ」「ワ」、「イ」「ヒ」「ヰ」、「ウ」「フ」、「エ」「ヘ」「ヱ」、「オ」「ホ」「ヲ」相亂れて一定ならず。これらはすべて正しき

に改めたり。その亂れたる例をあぐれば次の如し。

「は」を「わ」とかけるもの
　ヒワ(琵琶)　イワ(岩)

「わ」を「ハ」とかけるもの
　水ノアハ　事ハリ　サハガシ

「い」を「ゐ」とかけるもの
　クヰ(悔)

「ひ」を「い」とかけるもの
　ツイヤシ　スイ(吸ひ)　ヒクイ(頷)　カイコ

「ゐ」を「い」とかけるもの

田イ（田井）

「ひ」を「ゐ」とかけるもの

ハヰ（灰）　チヰサキ　ツヰニ　ヲホヰ（おほひ）

「う」を「ふ」とかけるもの

ウフル（植うる）

「ふ」を「う」とかけるもの

ヒロウ（拾ふ）　タウトミ（たふとみ）　クウレ（たふれ）

アヤウキ　アヤウカラズ

「え」を「へ」とかけるもの

タヘテ（絶えて）　ヲホヘス（おほえす）

「へ」を「ゑ」とかけるもの

イヱ（いへ）

「ゑ」を「へ」とかけるもの

ニヘ　ウヘ（飢ゑ）　スヘン（据ヱン）

「お」を「を」とかけるもの

ヲキナ

ヲキ　ヲク　ヲケリ

ヲコシテ　ヲコリテ

ヲコタル

ヲコナヒ　ヲコナハム　ヲコナハル、

ヲソレ　ヲソル　ヲソルヽ　ヲソロシキ

ヲチ(落)　ヲチホ

ヲト　ヲトツル　ヲトロク　ヲトロヘ

ヲナシ　ヲナシキ　ヲナシコロ

ヲノガ　ヲノレ　ヲノ〳〵　ヲノツカラ

ヲビタヾシク

ヲホキ(おほひ)　ヲホナキ　ヲホカタ

ヲホカレ　ヲホカリ　ヲホク

ヲホキニ　ヲホキナル

ヲホヘス　ヲホユル

ヲモクス

ヲモヒ　ヲモヒシカトモ　ヲモフ

ヲモムキ

ヲヤ(親)　ヲヤコ

ヲヨハス　ヲヨヒテ　ヲヨヒ

ヲロカ　ヲロソカ

「ほ」を「を」とかけるもの

イキヲヒ　イワヲ

トヲキ　トヲク

ナヲ　ナヲル

ホノヲ。　マトヲ。(間遠)

方丈記

行ゆく河のながれはたえずして、しかも本もとの水にあらず。よどみにうかぶうたかたはかつきえかつむすびて、ひさしくとどまる事なし。世中にある、人と栖と又かくのごとし。たましきのみやこのうちに棟をならべ、甍いらかをあらそへるたかきいやしき人のすまひは世々をへてつきせぬ物なれども、是をまことかと尋ぬれば、昔しありし家はまれなり。或はこぞ

「とゞまる事」大福光寺本「トゞマリタルタメシ」扶イ本「とゞまりたる事」トス

やけてことしは作り、或は大家ほろびて小家となる。すむ人も是に同じ。ところもかはらず、人もおほかれど、いにしへ見し人は二三十人が中にわづかにひとりふたりなり。朝に死に、夕に生るゝならひ、たゞ水の泡にぞ似りける。不レ知、うまれ死ぬる人いづかたより来たり、いづかたへか去る。又不レ知、かりのやどり、たが爲にか心をなやまし、なにゝよりてか目をよろこばしむる。そのあるじとすみかと無常をあらそふさま、いはゞあさがほの露にことならず。或は露おちて花のこれり。のこるといへどもあさ日にかれぬ。或は花しぼみて露なほきえず。きえずといへども、夕をまつ事なし。

「ことしは作り」十鋼光寺本「コトシックレリ」扶イ本「今年は作れり」トス

「泡」大福光寺本「アハ」トス

予もの心をしれりしよりこのかた四十余年あまりの春秋をおくれるあひだに、世の不思議を見る事やたびたびになりぬ。去ぬる安元三年四月廿八日かとよ。風はげしくふきて、しづかならざりし夜、いぬの時許みやこの東南より火いできて西北にいたる。はてには朱雀門、大極殿、大學れう、民部省などまでうつりて、一夜のうちに塵灰となりにき。ほもとは樋口富小路とかや、病人をやどせるかりやよりいできたりけるとなん。ふきまよふ風にとかくうつりゆくほどに扇をひろげたるがごとくすゑひろになりぬ。とほき家は煙にむせび、ちかきあたりはひたすら焔を地にふきつけたり。そらには灰を

「予」扶イ本「およそ」トス

「このかた」大福光寺本ナシ

「去ぬる」大福光寺本扶イ本「去」トス

「病人」大福光寺本「舞人」トス

ふきたてたれば、火のひかりにえいじて、あまねくくれなゐなる中に、風にたへず、ふきゝられたるほのほ飛が如くして、一二町をこえつゝうつりゆく。其中の人うつし心あらむや。或は煙にむせびてたふれふし、或はほのほにまぐれてたちまちに死ぬ。或は身ひとつからうじてのがるゝも資財を取出るに及ばず。七珍萬寶さながら灰燼となりにき。その費えいくばくぞ。其のたゞひ公卿の家十六やけたり。ましてそのほかはかぞへしるにおよばず。惣てみやこのうち三分が一に及べりとぞ。男女しぬるもの數十人、馬牛のたぐひ邊際を不レ知。人のいとなみ皆おろかなるなかに、さしもあやふき京中の家をつくるとて、たからを費し、こゝろをなやます事はすぐれて、あぢきなくぞ侍る。又治承四年卯月のころ、中御門京極のほどよりおほきなるつじ風おこりて六條わたりまでふける事はべりき。三四町をふきまくるあひだにこもれる家ども、大きなるもちひさきもひとつとしてやぶれざるはなし。さながらひらにたふれたるもあり、けたはしらばかりのこれるもあり、かどをふきはなちて四五町がほかにおき、又かきをふきはらひて、となりとひとつになせり。いはむや、いへのうちの資財かずをつくしてそらにあがり、ひはた、ふきいたのたぐひ、冬のこのはの風に亂るが如し。ちりを煙の如く吹たてたれば、

「火」大福光寺本「日」トス
「たへず」大福光寺本「タエズ」トス
「そのほかは」ノ「は」扶イ本家藤本ニヨル

すべて目もみえず。おびたゞしくなりとよむほどに、ものいふこえもきこえず。彼の地獄の業の風なりとも、かばかりにこそはとぞおぼゆる。家の損亡せるのみにあらず、是をとりつくろふあひだに身をそこなひ片輪づげる人かずもしらず。この風ひつじさるの方にうつりゆきて、おほくの人のなげきをなせり。風はつねにふく物なれど、かゝる事やある。たゞ事にあらず。さるべきものゝさとしかなどぞうたがひはべりし。又治承四年みな月の比、にはかにみやこうつり侍りき。いとおもひの外なりし事なり。おほかた、此の京のはじめをきける事は嵯峨の天皇の御時みやことさだまりにけるよりの

「ひつじさる」大福光寺本ナシ「ヒツシ」トス
「な」大福光寺本ナシ
「風」宗鶴本「颱」トシ扶イ本「辻風」トス

ち、すでに四百余歳をへたり。ことなるゆゑなくて、たやすく、あらたまるべくもあらねば、これを世の人やすからず、うれへあへるさま、實に理にもすぎたり。されど、とかくいふかひなくて、帝よりはじめたてまつりて大臣公卿みな悉くうつろひ給ひぬ。世につかふるほどの人、たれか一人ふるさとにのこりをらむ。つかさくらゐに思をかけ、主君のかげをたのむほどの人は、一日なりとも、とくうつろはむとはげみ、時をうしなひ、世にあまされてごする所なきものは、うれへながら、とまりをり。のきをあらそひし人のすまひ日をへつゝあれゆく。家はこぼたれて淀河にうかび、地はめのまへに

「さま」大福光寺本ナシ

畠となる。人の心みなあらたまりて、たゞ馬くらをのみおもくす。うしくるまをようする人なし。西南海の所領をねがひて東北の庄園をこのまず。その時おのづから事のたよりありて、つのくにの今の京にいたれり。所のありさまをみるに、「其の地狭く條里をわるに足らず。北は山にそひて高く、」南は海ちかくてくだれり。なみのおとつねにかまびすしく、しほ風ことにはげし。内裏は山の中なれば、彼の木のまろどのもかくやとなか〳〵やうかはりていうなるかたもはべりき。ひゝにこぼち、かはもせに、はこびくだすいへ、いづくにつくれるにかあらむ。なほむなしき地はおほく、つくれるやは

「所領」大編光寺本「領所」トス

「其の地……高く」大編光寺本扶イ本ナシ

「はべりき」ノ「き」大編光寺本ナシ

すくなし。古京はすでにあれて新都はいまだならず。ありとしある人は皆浮雲のおもひをなせり。もとよりこの所にをるものは地をうしなひてうれふ。今うつれる人は土木のわづらひある事をなげく。みちのほとりをみれば、車にのるべきは馬にのり、衣冠布衣なるべきは多くひたゝれをきたり。みやこの手振りたちまちにあらたまりて、たゞひなびたるものゝふにことならず。世の亂るゝ瑞相とかきけるもしるく、日をへつゝ世中うきたちて、人の心もをさまらず、たみのうれへつひにむなしからざりければ、おなじき年の冬なほこの京に歸り給にき。されどこぼちわたせりし家どもはいかになりに

「とかきける」家編本「ト書ヲケル」トス

けるにか、悉くもとの様にしもつくらず。つたへきく、いにしへのかしこき御世にはあはれみを以て國をゝさめ給ふ。すなはち殿にかやふきて其のきをだにとゝのへず、煙のともしきをみ給ふ時はかぎりあるみつき物をさへゆるされき。是民をめぐみ、世をたすけ給ふによりてなり。今の世のありさま、昔になぞらへてしりぬべし。又養和のころとか、久くなりておぼえず。二年があひだ世中飢渇して、あさましき事侍りき。或は春夏ひでり、或は秋大風洪水などよからぬ事どもうちつづきて、五穀ことゞくくならず。空しく、春耕しなつうういとなみありて秋かり、冬をさむるぞめきはなし。是により

「空しく春耕し」天國光寺本脱セリ

て、國々の民、或は地をすてゝ、さかひをいで、或は家をわすれて山にすむ。さま〳〵の御祈はじまりて、なべてならぬ法どもおこなはるれど、更に其のしるしなし。京のならひ、なにわざにつけても、みなもとはゐなかをこそたのめるに、たえてのぼるものなければ、さのみやはみさをもつくりあへん。ねむじわびつゝさま〳〵の財物かたはしよりすつるが如くすれども、更にめみたつる人なし。たま〳〵かふる者は金をかろくし、粟をおもくす。乞食路のほとりにおほく、うれへかなしむこゑ耳にみてり。まへのとしかくの如くからうじてくれぬ。あくるとしはたちなほるべきかとおもふほどに、

あまりさへ、えきれいうちそひて、まさゝまにあとかたなし。世人みな病死にければ、日をへつゝ、きはまりゆくさま、少水の魚のたとへにかなへり。はてにはかさうちき、足ひきつゝみ、よろしきすがたしたる物、ひたすらに、家ごとにこひありく。かくわびしれたるものどもの、ありくかとみれば、すなはちたふれふしぬ。築地のつら、道のほとりにうゑしぬる物のたぐひ、かずも不レ知。とりすつるわざもしらねば、くさきか世界にみち満て、かはりゆくかたちありさま、目もあてられぬことおほかり。いはむや、かはらなどには、馬車、のゆきかふ道だになし。あやしきしづやまがつもちからつき

「病死にければ」大福光寺本「ゲイシヌレハ」トアリ

たきゞさへともしくなりゆけば、たのむかたなき人は、みづからが家をこぼちて、いちにいでゝうる。一人がもちていでたるあたひ、猶一日が命にだに不レ及とぞ。あやしき事はかゝる薪の中にあかきにつき、はくなど所々にみゆる木あひまじれり。是をたづぬれば、すべきかたなき物、ふる寺にいたりて、佛をぬすみ、堂のものの具をやぶりとりて、わりくだけるなりけり。濁悪世にしもむまれあひて、かゝる心うきわざをなん見侍し。又いとあはれなる事も侍き。さりがたき妻をとこもちたる物はそのおもひまさりてふかき物必さきだちて死ぬ。その故はわが身はつぎにして、人をいたはしくおも

「かゝる」大福光寺本ナシ

「まじれり、是を」大福光寺本「マシハリケルヲ」トス

「又」大福光寺本ナシ

ふあひだに、まれ〳〵えたるくひ物をもかれにゆづるにより
てなり。さればおやこある物はさだまれる事にておやぞさき
だちける。又は、の命つきたるをも不レ知していとけなき子
のなほちをすひつゝふせるなどもありけり。仁和寺に隆曉法
印といふ人かくしつゝ數も不レ知、死る事をかなしみて、そ
のかうべのみゆるごとにひたひに阿字をかきて緣を結ばしむ
るわざをなんせられける。人かずをしらむとて、四五兩月を
かぞへたりければ、京のうち、一條よりは南、九條より北、
京極よりはにし、朱雀よりは東の路のほとりなるかしら、す
べて四萬二千三百あまりなんありける。いはむや、その前後

にしぬる物おほく、又河原白河西の京、もろ〳〵の邊地など
をくはへていはゞ際限もあるべからず。いかにいはむや、七
道諸國をや　崇德院の御位の御時、長承のころとか、かゝる
ためしありけりときけど、その世のありさまはしらず、まの
あたりめづらかなりし事なり。又おなじころかとよ、おびた
ゞしくおほなゐふること侍き。そのさまよのつねならず。山
はくづれて河をうづみ、海はかたぶきて陸地をひたせり。土
さけて水わきいで、いはほわれて谷にまろびいる。なぎさこ
ぐ船は波にたゞよひ、道ゆく馬はあしのたちどをまどはす。
みやこのほとりには在々所々堂舍塔廟ひとつとして、またか

らず。或はくづれ、或はたふれぬ。ちりはひたちのぼりてさかりなる煙の如し。地のうごき、家のやぶるゝおと、いかづちにことならず。家の内にをれば、忽にひしげなんとす。はしりいづれば、地われさく。はねなければ、そらをもとぶべからず。龍ならばや雲にも登らむ。おそれのなかにおそるべかりけるは只地震なりけりとこそ覺え侍しか。かくおびたゝしくふる事はしばしにてやみにしかども、そのなごりしばしはたえず。よのつねおどろくほどのなゐ、二三十度ふらぬ日はなし。十日廿日すぎしかば、やう〳〵まとほになりて、或は四五度、二三度、若は一日まぜ、二三日に一度など、おほ

かたそのなごり三月ばかりや侍りけむ。四大種のなかに、水火風はつねに害をなせど、大地にいたりてはことなる變をなさず。昔齊衡のころとか、おほなゐふりて、東大寺の佛のみぐしおちなど、いみじき事どもはべりけれど、なほこのたびにはしかずとぞ。すなはちは人みなあぢきなき事をのべて、いさゝか心のにごりもうすらぐとみえしかど、月日かさなり、年へにしのちはことばにかけていひいづる人だになし。すべて世の中のありにくゝ、わがみとすみかとのはかなくあだなるさま、又かくのごとし。いはむや、所により、身のほどにしたがひつゝ、心をなやます事はあげて計ふべからず。若お

のれが身かずならずして、權門のかたはらにをるものはふかくよろこぶ事あれども、おほきにたのしむにあたはず。なげきせちなるときもこゑをあげてなくことなし。進退やすからず。たちゐにつけて、おそれをのゝくさま、たとへば、すゞめのたかのすにちかづけるがごとし。若まづしくして、とめる家のとなりにをるものは、あさゆふふすぼきすがたをはぢて、へつらひつゝいでいる。妻子僮僕のうらやめるさまをみるにも、福家の人のないがしろなるけしきをきくにも、心念々にうごきて、時としてやすからず。若せばき地にをれば、ちかく炎上ある時其災をのがるる事なし。若邊地にあれば往反わ

づらひおほく、盜賊の難はなはだし。又いきほひある物は貪欲ふかく、獨身なる物は人にかろめらる。財あれば、おそれおほく、貧ければ、うらみ切なり。人をたのめば、身他の有なり。人をはぐくめば、心恩愛につかはる。世にしたがへば、身くるし。したがはねば、狂せるにゝたり。いづれの所をしめて、いかなるわざをしてか、しばしも此の身をやどし、たまゆらも、こゝろをやすむべき。

わがみ父かたの祖母の家をつたへて、ひさしく彼の所にすむ。其後縁かけて、身おとろへて、しのぶかたゝしげかりしかど、つひに跡とむる事をえず、みそぢあまりにして、更にわ

「わがみ」大福光寺本「ワカ、ミ」トス
「跡とむる」大福光寺本「ヤト、ムル」トス

が心と一の菴をむすぶ。これをありしすまひにならぶるに十分が一なり。居屋ばかりをかまへて、はか〳〵しく屋をつくるにおよばず。わづかに築地をつけりといへども、かどをたつるたづきなし。たけをはしらとして、車をやどせり。雪ふり、風ふくごとに、あやふからずしもあらず。所かはらちかければ、水難もふかく、白浪のそれもさわがし。すべてあられぬよをねんじすぐしつゝ、心をなやませる事三十餘年なり。其間をり〳〵のたがひめにおのづからみじかき運をさとりぬ。すなはちいそちの春をむかへて家を出で、世をそむけり。もとより妻子なければ、すてがたきよすがもなし。身

「たがひめに」の「に」大福光寺本ナシ

に官祿あらず。なにゝ付けてか執をとゞめん。むなしく、大原山の雲にふして、又五かへりの春秋をなん經にける。こゝに六そぢの露きえがたにおよびて、更にすゑはのやどりをむすべる事あり。いはゞ旅人の一夜の宿をつくり、老たるかひこのまゆをいとなむがごとし。是をなかごろのすみかにならぶれば、又百分が一におよばず。とかくいふほどに齡は歳々にたかく、すみかはをり〳〵にせばし。その家のありさま、よのつねにもにず。ひろさはわづかに方丈、たかさは七尺がうちなり。所をおもひさだめざるがゆゑに地をしめてつくらず。つちだいをくみ、うちおほひをふきて、つぎめごとにかけが

ねをかけたり。若心にかなはぬ事あらば、やすくほかへうつさむがためなり。そのあらためつくる事いくばくのわづらひかある。つむところわづかに二兩。くるまのちからをむくゆるほかには、さらに他のようどいらず。いま日野山のおくにあとをかくしてのち、東に三尺餘のひさしをさして、しばをりくぶるよすがとす。南にたけのすのこをしき、その西にあかたなをつくり、北によせて、障子をへだてゝ阿彌陀の繪像を安置し、そばに普賢をかけ、まへに法花經をおけり。東のきはにわらびのほどろをしきて、よるのゆかとす。西南に竹のつりたなをかまへて、くろきかはご三合をおけり。すなは

「むくゆる外」大編光寺本「ムクフホカ」トシ、扶イ本「むくふ外」トシ宗藤本「ムクフノ外」トス

「南に」ノ「に」大編光寺本ナシ

「普賢をかけ」大編光寺本「カキ」トセリ

ち和歌、管絃、往生要集ごときの抄物をいれたり。かたはらに、琴琵琶おの〳〵一張をたつ。いはゆるをり琴つぎびはこれなり。かりのいほりのありやうかくの如し。その所のさまをいはゞ、南にかけひあり。いはをたてゝ水をためたり。林の木ちかければ、つま木をひろふにともしからず。名を外山といふ。まさきのかつらあとうつめり。谷しげけれど西はれたり。觀念のたよりなきにしもあらず。春はふぢなみをみる。紫雲のごとくして西方にゝほふ。夏は郭公をきく。かたらふごとに、しでの山ぢをちぎる。あきはひぐらしのこゑみゝに滿てり。うつせみのよをかなしむかときこゆ。冬は雪をあは

「名を外山といふ」大編光寺本「名ヲゝトハ山トイフ」トアリ

「かなしむかときこゆ」大編光寺本

れぶ。つもりきゆるさま罪障にたとへつべし。若念佛物うく、讀經まめならぬ時は、みづからやすみ、身づからおこたる。さまたぐる人もなく、又はづべき人もなし。ことさらに無言をせざれども、獨りをれば、口業をゝさめつべし。必ず禁戒をまもるとしもなくとも境界なければ、なにゝつけてかやぶらん。若又あとのしらなみにこの身をよするあしたには、をかのやにゆきかふ船をながめて、滿沙彌が風情をぬすみ、もしかつらのかぜはをならすゆふべには潯陽のえをおもひやりて源都督のおこなひをならふ。若餘興あれば、しば〳〵松のひゞきに秋風樂をたぐへ、水の音にとに流泉の曲をあやつる。

「カナシムホトキコユ」トス

藝はこれつたなけれども人のみゝをよろこばしめむとにはあらず。ひとりしらべ、ひとり詠じて、みづから情をやしなふばかりなり。又ふもとに一のしばのいほりあり。すなはち、この山もりがをる所なり。かしこにこわらはあり。とき〳〵きたりてあひとぶらふ。若つれ〳〵なる時はこれをともとして遊行す。かれは十歳これは六十。そのよはひことのほかなれど、心をなぐさむることこれおなじ。或はつばなをぬき、いはなしをとり、又ぬかごをもり、せりをつむ。或はすそわの田ゐにいたりておちぼをひろひて、ほくみをつくる。若日うらゝかなれば、みねによぢのぼりて、はるかにふるさとの

「十歳」三本共ニカクアリ 流布本「十六歳」トアルハ「六十」ニ對シテ後人ノ改メシナラム

大福光寺本「日」ナシ

そらをのぞみ、こはた山、ふしみのさと、鳥羽、はつかしをみる。勝地はぬしなければ、心をなぐさむるにさはりなし。あゆみわづらひなく、心とどまるいたるときは、これよりみねつゞき、すみ山をこえ、かさとりをすぎ、或は石間にまうで、或は石山をがむ。若は又あはづのはらをわけつゝ蟬丸のおきながあとをとふらひ、たなかみ河をわたりてさるまろまうちきみがはかをたづぬ。かへるさにはをりにつけつゝさくらをかり、もみぢをもとめ、わらびをゝり、このみをひろひて、かつは佛にたてまつり、かつは家づとにす。若夜しづかなれば、まどの月に故人をしのび、さるのこゑにそでをうるほす。

「蟬丸」大福光寺本「セミウタ」トセリ

くさむらのほたるはとぼくまの島のかゝりびにまがひ、あか月のあめは、おのづからこのはふくあらしににたり。山どりのほろとなくをきゝても、ちゝかはゝかとうたがひ、みねのかせぎのちかくなれたるにつけても、よにとぼざかるほどをしる。或は又うづみ火をかきおこして、おいのねざめのともとす　おそろしき山ならねばふくろふのこゑをあはれむにつけても、山中の景氣、をりにつけてつくる事なし。いはむや、ふかくおもひ、ふかくしらむ人のためにはこれにしもかぎるべからず。おほかた、この所にすみはじめし時は、あからさまとおもひしかども、いますでにいつとせをへたり。か

「眞木の島の」大福光寺本「マキノ」トセリ

「いはむや」大福光寺本「ハイムヤ」トセリ

りのいぼりもやゝふるさととなりて、のきにくちばふかく、つちゐにはこけむせり　おのづから、ことのたよりに、みやこをきけば、この山にこもりゐてのち、やむことなき人のかくれ給へるも、あまたきこゆ。まして、そのかずならぬたぐひ、つくしてこれをしるべからず。たび〳〵の炎上にほろびたる家、又いくそばくぞ。たゞかりのいぼりのみのどけくして、おそれなし。ぼどせばしといへども、よるふすゆかあり、ひるゐる座あり。一身をやどすに不足なし。寄居はちひさきかひをこのむ。これ身しれるによりてなり。みさごはあらいそにゐる。すなはち人をおそるゝがゆゑなり。われまたかく

「たび〳〵の炎上」大福光寺本「ノ」ナシ

「寄居」大福光寺本「カムナ」トアリ

のごとし。身をしり、よをしれゝば、ねがはず、わしらず。たゞしづかなるを望みとし、うれへ無きをたのしみとす。惣てよの人のすみかをつくるならひ、必ずしも身のためにせず。或は妻子眷屬の爲につくり、或は親昵朋友の爲につくる。或は主君師匠および、財寶牛馬の爲にさへこれをつくる。われ今身の爲にむすべり、人の爲につくらず。ゆゑいかんとなれば、今のよのならひ、此の身のありさま、ともなふべき人もなく　たのむべきやつこもなし。縱ひろくつくれりとも、たれをやどし、たれをかすゑん。夫人のともとあるものは、とめるをたふとみ、ねむごろなるをさきとす。必ずしもなさけ

あるとすなほなるとをば愛せず。只絲竹花月をともとせんにはしかじ。人のやつこたる物は賞罰はなはだしく、恩顧あつきをさきとす。更にはくゝみあはれむと、やすくしづかなるとをばねがはず。只わが身を奴婢とするにはしかず。いかゞ奴婢とするとならば、若なすべき事あれば、すなはちおのが身をつかふ。たゆからずしもあらねど、人をしたがへ、人をかへりみるよりはやすし。若、ありくべき事あれば、みづからあゆむ。くるしといへども、馬くら牛車と心をなやますにはしかず。今一身をわかちて二の用をなす。手のやつこ、足ののりものよくわが心にかなへり。心身のくるしみをしれゝ

ば、くるしむ時はやすめつ、まめなればつかふ。つかふとてもたびゝすぐさず物うしとても心をうごかす事なし。いかにいはむや、つねにありき、つねにはたらくは、養性なるべし。なんぞいたづらに、やすみをらん。人をなやますは又罪業なり。いかゞ他の力をかるべき。衣食のたぐひ又おなじ。ふぢの衣、あさのふすま、うるにしたがひて、はだへをかくし、野邊のをはぎ、みねのこのみ、わづかに命をつぐばかりなり。人にまじはらざれば、すがたをはづるくいもなし。かてともしければ、おろそかなる報をあまくす。惣てかやうのたのしみとめる人にたいしていふにはあらず。只わが身ひと

「は又」大福光寺本ナシ

つにとりて、むかし今とをなぞらふるばかりなり。夫三界は只心ひとつなり。心若やすからずば、象馬七珍もよしなく、宮殿楼閣ものぞみなし　今さびしきすまひ、一間のいほり、一身の乞匂みづからこれを愛す。おのづからみやこにいでゝ、身の恥となれる事をはづといへども、かへりてここにをる時は他の俗塵にはする事をあはれむ。若、人このいへる事をうたがはゞ、魚と鳥とのありさまを見よ。魚は水にあかず。いをにあらざれば、その心をしらず。とりは林をねがふ。鳥にあらざれば、其の心をしらず。閑居の氣味も又おなじ。すまずして、一誰かさとらむ。抑一期の月かげかたぶきて、餘算の山のはに

ちかし。たちまちに三途のやみにむかはむとす。なにのわざをかゝこたむとする。佛のをしへ給ふおもむきは事にふれて執心なかれとなり。今草庵をあいするも咎とす、閑寂に着するもさはりなるべし。いかゞ要なきたのしみをのべて、あたら時をすぐさむ。しづかなるあか月、この理をおもひつゞけて、みづから心にとひていはく、よをのがれて、山林にまじはるは心をゝさめて、道をおこなはむとなり。しかるを汝すがたは聖人に似て心はにごりにしめり、すみかはすなはち淨名居士のあとをけがせりといへども、たもつところはわづかに周梨槃特が行にだにおよばず。若、これ貧賤の報のみづ

「咎とす」大福光寺本ナシ

「さはり」大福光寺本「サハカリ」トス

「聖人に似て」の「似」大福光寺本ナシ

からなやますか、はた又妄心のいたりて狂せるか。そのとき、心更にこたふる事なし。只かたはらに舌根をやとひて不請の阿彌陀佛兩三遍申て、やみぬ。

千時建暦のふたとせやよひのつこもりごろ、桑門の蓮胤とやまのいほりにしてこれをしるす。

方丈記

昭和八年四月二十日印刷
昭和八年四月二十五日發行

岩波文庫・教科書版
26

方丈記★
定價二十錢

校訂者　山田孝雄
東京市神田區一ツ橋通町三番地
發行者　岩波茂雄
東京市神田區錦町三丁目十七番地
印刷者　白井赫太郎
精興社印刷

發行所　東京市神田區一ツ橋通町三番地　岩波書店
電話九段（二六一八七）・（二六一八八）番
振替口座東京二六二四〇番
小倉部専用（〇三一八九）・（〇三一八〇）番

（寺島製本）

岩波文庫教科書版目錄

第一編　古事記　幸田成友校訂　定價二十錢
第二編　白文萬葉集上卷　佐佐木信綱編　定價一圓
第三編　白文萬葉集下卷　佐佐木信綱編　定價八十錢
第四編　新訓萬葉集上卷　佐佐木信綱編　定價八十錢
第五編　新訓萬葉集下卷　佐佐木信綱編　定價六十錢
第六編　古今和歌集　尾上八郎校訂　定價四十錢
第七編　源氏物語（一）　島津久基校訂　定價四十錢
第八編　源氏物語（二）　島津久基校訂　定價四十錢
第九編　源氏物語（三）　島津久基校訂　定價四十錢
第十編　源氏物語（四）　島津久基校訂　定價六十錢
第十一編　源氏物語（五）　島津久基校訂　（近刊）
第十二編　枕草子（春曙抄）上卷　池田龜鑑校訂　定價四十錢
第十三編　枕草子（春曙抄）中卷　池田龜鑑校訂　定價四十錢
第十四編　枕草子（春曙抄）下卷　池田龜鑑校訂　（近刊）
第十五編　大鏡　和田英松校訂　定價四十錢
第十六編　新古今和歌集　佐佐木信綱校訂　定價六十錢
第十七編　平家物語上卷　山田孝雄校訂　定價四十錢
第十八編　平家物語下卷　山田孝雄校訂　定價六十錢
第十九編　徒然草　西尾實校訂　定價二十錢
第二十編　奥の細道（その他）　伊藤松宇校訂　定價二十錢
第二十一編　日本永代藏　和田萬吉校訂　定價二十錢
第二十二編　世間胸算用　和田萬吉校訂　定價二十錢
第二十三編　訓讀日本書紀上卷　黑板勝美編　定價二十錢
第二十四編　訓讀日本書紀中卷　黑板勝美編　（近刊）
第二十五編　訓讀日本書紀下卷　黑板勝美編　（續刊）
第二十六編　方丈記　山田孝雄校訂　定價二十錢
第二十七編　紫式部日記　池田龜鑑校訂　定價二十錢
第二十八編　更級日記　西下經一校訂　定價二十錢
第二十九編　增鏡　和田英松校訂　定價四十錢

附記—本叢書は、高等諸學校教科用に供するを目標として編輯したものであるが、一般國文學研究者に取つて非常に便利な書入本となり得ると信じます。〔四六判　フワイバー製〕

讀書子に寄す

——岩波文庫發刊に際して——

岩波茂雄

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。嘗ては民を愚昧ならしめるために學藝が最も狹き堂宇に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の壟占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫は此要求に應じそれに勵まされて生まれた。それは生命ある不朽の書を少數者の書齋と研究室とより解放して街頭に限なく立たしめ民衆に伍せしめるであらう。近時大量生産豫約出版の流行を見る。その廣告宣傳の狂態は結く措くも後代に恥すと謂所する全集が其編輯に萬全の用意をなしたるか。千古の典籍の繙譯企圖に敬虔の態度を缺かざりしか。更に分冊を許さず讀者を繫縛して數十册を強ふるが如き、果して其揭言する學藝解放の所以なりや。吾人は天下の名士の聲に和して之を推暴するに躊躇するものである。この秋にあたつて岩波書店は自己の責務の愈重大なるを思ひ、從來の方針の徹底を期するため既に十數年以前より志して來た計畫を愼重審議この際斷然實行することにした。吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西に亙つて文藝哲學社會科學自然科學等種類の如何を問はず、苟くも萬人の必讀すべき眞に古典的價値ある書を厳選して簡易なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は豫約出版の方法を採らざるが故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書物を各個に自由に選擇することが出來る。携帶に便にして價格の低きを最主とするが故に、外觀を顧みざるも內容に至つては嚴選最も力を盡し從來の岩波出版物の特色たる徒費排せしめようとする。この計畫たるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は萬力を傾倒しあらゆる犧牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んで此舉に參加し、希望と忠言とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上經濟的には甚も困難多き此事業に敢て當らんとする吾人の志を諒として其達成のため世の讀書子とのうるはしき共同を期待する。

昭和二年七月

既刊書目

國文學

萬葉集 上卷 佐佐木信綱編 ★★
萬葉集 下卷 佐佐木信綱編 ★★
萬葉集 上卷 佐佐木信綱編 ★★
萬葉集 下卷 佐佐木信綱編 ★★
古事記 倉田虎友校訂 ★
日本書紀 上卷 黑板勝美編 ★
日本書紀 中卷 黑板勝美編 ★★
古語拾遺 加藤玄智校訂 ★
水鏡 和田英松校訂 ★★
大鏡 和田英松校訂 ★★
增鏡 和田英松校訂 ★★
榮花物語 上卷 三條西公正校訂 ★★
榮花物語 中卷 三條西公正校訂 ★★
伊勢物語 原代數賢校訂 ★
竹取物語 附錄 島津久基校訂 ★
平家物語 上卷 山田孝雄校訂 ★★
平家物語 下卷 山田孝雄校訂 ★★
源氏物語 (一) 島津久基校訂 ★★
源氏物語 (二) 島津久基校訂 ★★
源氏物語 (三) 島津久基校訂 ★★
源氏物語 (四) 島津久基校訂 ★★
土佐日記 池田龜鑑校訂 ★
紫式部日記 池田龜鑑校訂 ★
更級日記 西下經一校訂 ★
枕草子 (春曙抄) 上卷 池田龜鑑校訂 ★★
枕草子 (春曙抄) 中卷 池田龜鑑校訂 ★★
倭漢朗詠集 山田孝雄校訂 ★
古今和歌集 尾上八郎校訂 ★★
新撰山家集 佐佐木信綱校訂 ★★
新古今和歌集 佐佐木信綱校訂 ★★
金槐和歌集 改訂增補 斎藤茂吉校訂 ★★
藤原定家歌集 (附定家卿百番自歌合) 佐佐木信綱校訂 ★★
法華義疏 上卷 聖德太子御製 花山信勝講義 ★★
正法眼藏隨聞記 懷奘筆錄 和辻哲郎校訂 ★
日蓮上人文抄 飯田正治校注 ★★
歎異抄 金子大榮校訂 ★
徒然草 西尾實校訂 ★
方丈記 山田孝雄校訂 ★
花傳書 世阿彌著 野上豐一郎校訂 ★
申樂談義 世阿彌著 野上豐一郎校訂 ★
能作書・曲付書・至花道 條條世阿彌著 野上豐一郎校訂 ★
入木道三部集 (附本朝能書傳) 岡麓校訂 ★
奥の細道 その他 芭蕉作 伊藤松宇校訂 ★
芭蕉七部集 伊藤松宇校訂 ★★★
芭蕉連句集 小宮豐隆編 ★★★
芭蕉俳句集 頴原退藏校註 ★★
蕪村七部集 伊藤松宇校訂 ★★
風俗文選 伊藤松宇校訂 ★★

鶉衣　石田元季校訂★★

おらが春・我春集　一茶作　萩原井泉水校訂★

柳多留　上巻　西原柳雨校訂★★

柳多留　中巻　西原柳雨校訂★★

柳多留　下巻　西原柳雨校訂★★

萬載狂歌集　野崎左文校訂★

徳和歌後萬載集　野崎左文校訂★

松の葉　藤田徳太郎校註★

松の落葉　藤田徳太郎校註★★

閑吟集　狂言小歌集　附宗祇小歌集　藤田徳太郎校註★

好色一代男　西鶴作　和田萬吉校訂★

好色一代女　西鶴作　和田萬吉校訂★

好色五人女　西鶴作　和田萬吉校訂★

日本永代藏　西鶴作　和田萬吉校訂★

世間胸算用　西鶴作　和田萬吉校訂★

西鶴織留　西鶴作　和田萬吉校訂★

武家義理物語　西鶴作　和田萬吉校訂★

武道傳來記　西鶴作　和田萬吉校訂★

椿說弓張月　上巻　曲亭馬琴作　和田萬吉校訂★★

椿說弓張月　中巻　曲亭馬琴作　和田萬吉校訂★★

椿說弓張月　下巻　曲亭馬琴作　和田萬吉校訂★★

鎧の櫂三重雄子　合戰　近松門左衛門作　和田萬吉校訂★

心中天の網島　我會　近松門左衛門作　和田萬吉校訂★

胡蝶物語　曲亭馬琴作　和田萬吉校訂★★

浮世風呂　式亭三馬作　和田萬吉校訂★

浮世床　式亭三馬作　和田萬吉校訂★

東海道膝栗毛　十返舍一九作　和田萬吉校訂★★

加賀鳶　河竹黙阿彌作★★

赤垣源藏・仲光　河竹黙阿彌作★

忍ぶの惣太　河竹黙阿彌作★★

孝子善吉　河竹黙阿彌作★★

鼠小僧　河竹黙阿彌作★★

實錄先代萩　河竹黙阿彌作★★

お靜三役　河竹黙阿彌作★★

笠森お仙　河竹黙阿彌作★★

清天の平　小僧　河竹黙阿彌作★★

鳴の平右衛門　河竹黙阿彌作★★

小說・戲曲・詩歌・隨筆・評論

こゝろ　夏目漱石著★★

草枕　夏目漱石著★★

道草　夏目漱石著★★

行人　夏目漱石著★★

漾虛集　夏目漱石著★★

草枕　夏目漱石著★

坊つちやん　夏目漱石著★

五重塔　幸田露伴著★

風流佛・一口劍　幸田露伴著★

二人女房　尾崎紅葉著★

觀音岩　前篇　川上眉山著★★

觀音岩　後篇　川上眉山著★★

にごりえ　たけくらべ　樋口一葉著★

うたかたの記（他三篇）　森鷗外著★

新曲浦島　島崎藤村作★

新曲浦島　巫女　藤村作★

運命論者　他二篇　國木田獨歩著★

源をたち　他二篇　國木田獨歩著★

號外　他六篇　國木田獨歩著★

櫻の實の熟する時　島崎藤村著★★

千曲川のスケッチ　島崎藤村著★

飯倉だより　島崎藤村著★

春を待ちつゝ　島崎藤村著★

生ひ立ちの記　島崎藤村著★

蒲團・一兵卒　田山花袋著★

田舍教師　田山花袋著★★

小僧の神樣　他十篇　志賀直哉著★★

和解・或る男の死・其の姉　志賀直哉著★★

陸奥直次郎長傳　藤原善郎著★

青銅の基督　長與善郎著★

偸盜　芥川龍之介著★

侏儒の言葉　芥川龍之介著★

耶蘇宗の誕生日　佐藤春夫著★★

入江のほとり　正宗白鳥著★

生まざりしならば　正宗白鳥著★

大石良雄　野上弥生子著★

海神丸　野上弥生子著★

出家とその弟子　倉田百三著★★

布施太子の入山　倉田百三著★

幸福者　武者小路實篤著★★

その妹　武者小路實篤著★

人間萬歲　武者小路實篤著★

友情　武者小路實篤著★

煤煙　森田草平著★★

波　山本有三著★★

病牀六尺　正岡子規著★★

墨汁一滴　正岡子規著★★

仰臥漫錄　正岡子規著★★

子規歌集　正岡子規著★

左千夫歌集　斎藤茂吉文明評論★

左千夫歌論抄　斎藤茂吉編★★

上田敏詩抄　蒲原有明々編★★

晚翠詩抄　土井晚翠著★★

藤村詩抄　島崎藤村自選★★

有明詩抄　蒲原有明著★★

泣菫詩抄　薄田泣菫著★★

道遙遺稿　坪内逍遙著★★

歌舞音樂略史　小中村清矩著★★

俗樂旋律考　上原六四郎著★

蘭學事始　杉田玄白著　野上豐一郎校訂★

茶の本　岡倉覺三著　村岡博譯★

綱島梁川集　安倉信成編★★

清澤文集　清澤滿之著★★

福澤撰集　福澤諭吉著★★

北村透谷集　島崎藤村編★★

海舟座談　巖本善治編★★

外國文學（小說・戲曲・詩）

杜詩　卷之一　漆山又四郎譯註　★★
杜詩　卷之二　漆山又四郎譯註　★★
杜詩　卷之三　漆山又四郎譯註　★★
杜詩　卷之四　漆山又四郎譯註　★★
陶淵明集　漆山又四郎譯註　★★
唐詩選　上卷　漆山又四郎譯註　★★
唐詩選（附作者略傳）下卷　漆山又四郎譯註　★★
通俗古今奇觀　淡齋主人譯　青木正兒校註　★
即興詩人　上卷　森鷗外譯　★★
即興詩人　下卷　森鷗外譯　★★
ブランド　イブセン作　角田僖譯　★★
幽靈　ストリンドベルク作　小宮豐隆譯　★
妻　ストリンドベルク作　小宮豐隆譯　★
父　ストリンドベルク作　小宮豐隆譯　★
令嬢ユリエ　ストリンドベルク作　昇曙夢譯　★
オネーギン　プーシュキン作　米川正夫譯　★★
イワーン・イワーノヴィッチ　イワーン・ニキーフォロヴィッチとが喧嘩をした話　原久一郎譯　★
檢察官　ゴーゴリ作　米川正夫譯　★★
現代のヒーロー　レールモントフ作　中村白葉譯　★★
皇帝フョードル・アレクセヴィッチ　除村吉太郎譯　★
ブウニンとパブリン　トウルゲエニエフ作　小沼隆譯　★
罪と罰　第一卷　ドストエフスキイ作　中村白葉譯　★★
罪と罰　第二卷　ドストエフスキイ作　中村白葉譯　★★
罪と罰　第三卷　ドストエフスキイ作　中村白葉譯　★★
カラマーゾフの兄弟　第一卷　ドストエフスキイ作　米川正夫譯　★★★
カラマーゾフの兄弟　第二卷　ドストエフスキイ作　米川正夫譯　★★★
カラマーゾフの兄弟　第三卷　ドストエフスキイ作　米川正夫譯　★★★
カラマーゾフの兄弟　第四卷　ドストエフスキイ作　米川正夫譯　★★★
貧しき人々　ドストエフスキイ作　原久一郎譯　★★
永遠の良人　ドストエフスキイ作　原久一郎譯　★
戰爭と平和　第一卷　トルストイ作　米川正夫譯　★★★
戰爭と平和　第二卷　トルストイ作　米川正夫譯　★★★
戰爭と平和　第三卷　トルストイ作　米川正夫譯　★★★
戰爭と平和　第四卷　上　トルストイ作　米川正夫譯　★★★
戰爭と平和　第四卷　下　トルストイ作　米川正夫譯　★★★
戰爭と平和　第三卷　上　トルストイ作　米川正夫譯　★★
戰爭と平和　第三卷　下　トルストイ作　米川正夫譯　★★
結婚の幸福　トルストイ作　米川正夫譯　★★
イヴン・イリッチの死　トルストイ作　米川正夫譯　★
光あるうちに光の中を歩め　トルストイ作　米川正夫譯　★★
クロイツェル・ソナタ　トルストイ作　米川正夫譯　★★
復活　上卷　トルストイ作　中村白葉譯　★★★
復活　中卷　トルストイ作　中村白葉譯　★★
復活　下卷　トルストイ作　中村白葉譯　★★
闇の力　トルストイ作　米川正夫譯　★
生ける屍　トルストイ作　米川正夫譯　★
幼年時代　トルストイ作　米川正夫譯　★★
少年時代　トルストイ作　米川正夫譯　★
トルストイ民話集　人は何で生きるか他四篇　中村白葉譯　★
トルストイ民話集　イワンの馬鹿他八篇　中村白葉譯　★

櫻の園　チエーホフ作　米川正夫譯　★
伯父ワーニャ　チエーホフ作　米川正夫譯　★
三人姉妹　チエーホフ作　米川正夫譯　★
サーニン　上卷　アルツイバーシエフ作　中村白葉譯　★★
サーニン　下卷　アルツイバーシエフ作　中村白葉譯　★★
賢者ナータン　レツシング作　大庭茉莉邦譯　★★
ヘルマンとドロテア　ゲーテ作　佐藤通次譯　★
ギルヘルム・マイスター　上卷　ゲーテ作　林久男譯　★★★
ギルヘルム・マイスター　下卷　ゲーテ作　林久男譯　★★
ファウスト　第一部　森鷗外譯　★★★
ファウスト　第二部　森鷗外譯　★★★
若いヱルテルの惱み　ゲヨエテ作　昇曙夢譯　★★
グレンシュタイン　シルレル作　常貞譯　★★
ヴイルヘルム・テル　シラー作　櫻井政隆譯　★★
グリム童話集　第一　金田鬼一譯　★★
グリム童話集　第二　金田鬼一譯　★★
グリム童話集　第三　金田鬼一譯　★★
グリム童話集　第四　金田鬼一譯　★★
グリム童話集　第五　金田鬼一譯　★★
グリム童話集　第六　金田鬼一譯　★★
グリム童話集　第七　金田鬼一譯　★★
グリム童話集　第八　金田鬼一譯　★★
ゲエテの對話抄　エツケルマン著　鶴見英吉譯　★★
春の日ざめ　ヴエデキント作　野上豐一郎譯　★
埋木　キリシユネル作　森鷗外譯　★
トオマス・マン短篇集1　トオマス・マン作　實吉捷郎譯　★
トオマス・マン短篇集2　トオマス・マン作　實吉捷郎譯　★
祖父　グリルパルツエル作　関本恒助譯　★
みれん　シユニツツラ作　森鷗外譯　★★
アナトール小説集　コルネイユ作　木村太郎譯　★
青い鳥　メーテルリンク作　若月紫蘭譯　★★
ポリウクト　コルネイユ作　木村太郎譯　★
人間嫌ひ　モリエール作　鹽口有別譯　★
マノン・レスコオ　アベ・プレヴオ作　河盛好蔵譯　★★
從兄ボンス　上卷　バルザック作　水野亮譯　★★★
從兄ボンス　下卷　バルザック作　水野亮譯　★★★
知られざる傑作（他五篇）　バルザック作　水野亮譯　★★★
カルメン　メリメ作　杉捷夫譯　★
コロンバ　メリメ作　杉捷夫譯　★★
エトルリアの壺（外五篇）　メリメ作　杉捷夫譯　★
ノア・ノア　ゴオガン著　駒川堅市譯　★
日の出前　ハウプトマン作　桜本忠夫譯　★★
希臘の春　ハウプトマン作　城田紀一郎譯　★
ソアーナの異教徒　ハウプトマン作　奥津彦重譯　★★
水の上　モーパッサン作　吉江喬松譯　★★
ピエルとジャン　モウパッサン作　前田晃譯　★★
生の誘惑（原名イヴエット）　モウパッサン作　前田晃譯　★
お菊さん　ピエル・ロチ作　野上豐一郎譯　★★
氷島の漁夫　ピエル・ロチ作　吉江喬松譯　★★
若き日の手紙　ロマン・ロラン作　外山滋夫譯　★★
風車小屋だより　ドーデ作　佐藤輝夫譯　★★

愛と死との戯れ　序曲　ロマン・ロラン作　★
獅子座の流星群　ロマン・ロラン作　片山敏彦譯　★
法王廳の抜穴　アンドレ・ジッド作　石川淳譯　★★
クオレ　愛の学校　上卷　前田晁譯　★★
クオレ　愛の学校　下卷　前田晁譯　★★
恐ろしき蝶　ホセ・エチェガライ作　永田寛定譯　★★
作り上げた利害　ベトベンチ作　永田寛定譯　★
子守唄　シエルラ作　永田寛定譯　★
希臘羅馬神話　バルフィンチ作　野上豐一郎生子譯　★★★
フオースタス博士　マーロウ作　松尾和譯　★
バーンズ詩集　中村篤治譯　★★
エヴァンジェリン　ロングフェロウ作　齋藤悅子譯　★
クリスマス・カロル　ディッケンス作　森田草平譯　★
ブラウニングサウル　齋藤勇譯　★
ラム沙翁物語　野上豐一郎生子譯　★★
ブレイク抒情詩抄　齋藤勇譯　★
小公子　バアネット著　若松賤子譯　★★

聖女ヂョウン（ヂャンヌ・ダルク）　シヨオ作　野上豐一郎譯　★★
人と超人　シヨオ作　市川又彦譯　★★
鰐夫の家　シヨオ作　市川又彦譯　★
思想の運び得る限り（原題イノトセラ時代に歸れ）　シヨオ作　相良徳三譯　★★
耕文字　ホーツシ作　佐藤清譯　★★
ハーディ短篇集　幻想を追ふ女（他六篇）　森村豊譯　★★
ユリシーズ（一）　ヂエイムズ・ヂョイス著　森田・名原他四名譯　★
ユリシーズ（二）　ヂエイムズ・ヂョイス著　森田・名原他四名譯　★
ユリシーズ（三）　ヂエイムズ・ヂョイス著　森田・名原他四名譯　★

哲學・自然科學・文學・宗教・教育

プラソクラテスの辯明　久保勉譯　★
トンクリト　プロタゴラス　藤沢令夫譯　★
ブラトンプロタゴラス　天野貞祐譯　★★★
カント純粹理性批判　上卷　波多野精一譯　★★
カント純粹理性批判　下卷　宮本和吉譯　★★
カントプロレゴーメナ　桑木嚴翼譯　★
スピノザ哲學體系　小尾範治譯　★★

スピノザ知性改善論　島中雄三譯　★
哲學とは何か　ヴインデルバンド著　イマヌエル・カント　河東鉦譯　★
歴史と自然科學・道徳の原理に就て　ヴインデルバンド著　篠田英雄譯　★
認識の對象　リツケルト著　山内得立譯　★★
七大哲人　ヤイケン著　安倍能成譯　★★
科學の價値　ポアンカレ著　田邊元譯　★★
科學と方法　ポアンカレ著　吉田洋一譯　★★
科學者と詩人　ポアンカレ著　平林初之輔譯　★★
將來の哲學の根本命題　フオイエルバツハ著　植村豊六譯　★★
史的に見たる科學的宇宙觀の變遷　アーレニウス著　寺田寅彦譯　★★
アルプスの氷河第一部　ジヨンチンダル著　矢島祐利譯　★★
アルプスの氷河第二部　ジヨンチンダル著　矢島祐利譯　★★
自然認識の限界について・宇宙の七つの謎　ヂユボアレーモン著　坂田徳男譯　★
自然に於ける美藝術の一般的意義　ソロヴイヨフ著　高村理智夫譯　★
ケーベル博士隨筆集　久保勉　安倍能成編譯　★★

ファーブル昆蟲記　林達夫　山田吉彦譯
既刊　定價各★★
第一二分冊・第九分冊・第十分冊
第十二分冊・第十三分冊・第十四分冊
第十七分冊・第十八分冊
チヤールズ・ダーウキン　ド・ダーウキン著　小泉丹譯　★★
種の起原　上卷　ダーウキン著　小泉丹譯　★★★
人及び動物の表情について　ダーウキン著　中野好夫　江上波夫譯　★★★
雜種植物の研究　メンデル著　小泉丹譯　★
生命の不可思議上卷　ヘツケル著　後藤格次譯　★★
生命の不可思議下卷　ヘツケル著　後藤格次譯　★★
回想のセザンヌ　有島生馬譯　★
この人を見よ　ユーチエ著　安倍能成譯　★★
ミル自傳　西本正美譯　★★
佛蘭西文學史　ブリユンチエール著　岡根谷雄譯　★★★
伊太利文藝復興期の文化　上卷　ブルツクハルト著　村松恒一郎譯　★★
ベーター論集　田部重治譯　★★
ラフカディオ・ヘルン東西文藝評論　十一名義三郎　三宅義三郎譯　★★★

文學史の方法　ランソン著　岩波茂雄譯　★
人間の精神　レーム著　立花銑雄譯　★
戀愛論　上卷　ルツタンダル著　市川堅市譯　★★
戀愛論　下卷　ルツタンダル著　前川堅市譯　★★
戀愛と結婚　上卷　エレン・ケイ著　原田實譯　★★
戀愛と結婚　下卷　エレン・ケイ著　原田實譯　★★
イエス　ブツセ著　林達夫譯　★
イエスのミステリー（基督のまねび）　内村鑑三譯　★
懺悔錄（全譯）　ルソオ著　内村鑑三　無教會聖書研究會譯　★★★
懺悔錄　フオルナツロフ著　由谷省吾譯　★
懺悔錄　ドストエフスキイ著　内村鑑三譯　★★★
唯一者とその所有　上卷　スチルネル著　草間平作譯　★★
唯一者とその所有　下卷　スチルネル著　草間平作譯　★★
エミイル（第一篇）　ルソオ著　平林初之輔譯　★
エミイル（第二篇）　ルソオ著　平林初之輔譯　★★
エミイル（第三篇）　ルソオ著　平林初之輔譯　★
エミイル（第四篇）　ルソオ著　平林初之輔譯　★★
エミイル　ルソオ著　平林初之輔譯　★
懺悔錄　上卷　ルソオ著　石川徹　小松清譯　★★

懺悔錄　中卷　ルソオ著　石川徹　小松清譯　★★
懺悔錄　下卷　ルソオ著　石川徹　小松清譯　★★
人生論　トルストイ著　中村白葉譯　★★
獨逸國民に告ぐ　フイヒテ著　大津康譯　★★
内村鑑三隨筆集　内村鑑三著　★★
文明論之概略　福澤諭吉著　★★
論畫四種　坂崎坦編　★

法律・社會・政治・經濟

アテナイ人の國家　アリストテレス著　原田慶吉譯　★★
法の精神　上卷　モンテスキユー著　宮澤俊義譯　★★★
法の精神　下卷　モンテスキユー著　宮澤俊義譯　★★★
權利のための鬪爭　イエーリング著　日沼寧郎譯　★
民約論　ルソオ著　平林初之輔譯　★★
國富論　上卷　スミス著　大内兵衛　松川七郎譯　★★★
勞働者綱領　ラツサール著　小泉信三譯註　★
哲學の貧困　マルクス著　木下半治　淺野晃譯　★★

資本論初版鈔　マルクス著　長谷部文雄譯　★★
マルクス脳太人問題を論ず　久留間鮫造・新川雄六譯　★
エンゲルス自然辯證法上卷　加藤正・加古祐二郎譯　★★
エンゲルス自然辯證法下卷　加藤正・加古祐二郎譯　★★
住宅問題　エンゲルス著　加田哲二譯　★★
エンゲルス原始基督教史考　カウツキー基督教の成立　喜多野清一譯　★
家族・私有財産及エンゲルス著　國家の起源　西雅雄譯　★★
フォイエルバッハ論　エンゲルス著　佐野文夫譯　★
反デューリング論　上卷　エンゲルス著　長谷部文雄譯　★★
反デューリング論　下卷　エンゲルス著　長谷部文雄譯　★★
エンゲルス空想より科學へ　リヤザノフ著　長谷部文雄譯　★★
マルクス・エンゲルス傳　リヤザノフ著　長谷部文雄譯　★★
ローザ・ルクセンブルグの手紙　ルイゼ・カウツキー編　松井忠子譯　★★
マルクス・エンゲルス・イデオロギー　ドイツチエ・リヤザノフ編　三木清譯　★
レーニン　帝國主義　長谷部文雄譯　★★
レーニン　唯物論と經驗批判論　上卷　佐野文夫譯　★★
レーニン　唯物論と經驗批判論　中卷　佐野文夫譯　★★
レーニン　唯物論と經驗批判論　下卷　佐野文夫譯　★★
レーニン何をなすべきか　平田良衛譯　★★
經濟學及課稅之原理　リカード著　小泉信三譯　★★★
道德の經濟的基礎　シュタウディンガー著　草間平作譯　★
藝術經濟論　西本正英譯　★★
建築の七燈　ラスキン著　高橋松川譯　★★
この後の者にも　ラスキン著　西本正英譯　★★
地代論　リカードベルトウス著　山口正吾譯　★★
ベーベル婦人論　上卷　草間平作譯　★★
ベーベル婦人論　下卷　草間平作譯　★★
近代民主政治　一　ブライス著　松山武譯　★★
近代民主政治　二　ブライス著　松山武譯　★★
近代民主政治　三　ブライス著　松山武譯　★★
近代民主政治　四　ブライス著　松山武譯　★★
ギユイ社會學上より見た『藝術』第一部　大西克禮・小方庸正譯　★★
ギユイ社會學上より見た『藝術』第二部上　大西克禮・小方庸正譯　★★
ギユイ社會學上より見た『藝術』第二部下　大西克禮・小方庸正譯　★★

經濟要錄　佐藤信淵著　讀本國一校訂　★★

御註文に就て

□此の文庫は、普及を第一義として刊行する廉價版です。
□内容の厳選　古今東西のあらゆる古典及び、價値高き良書を網羅し、校訂、飜譯に於ても最善を期します。
□最低の廉價　出來る丈安く手に入れられる樣に、小さい形の中に、濃山の内容を盛る形式を採りました。
□購求の自由　しかも讀者が全く自由に欲しい本を隨時求められる自由選擇の方法を採りました。
□印刷の鮮明、校正の正確、製本の堅牢等の實際的方面に於ても亦最善を期します。
□體裁は菊半截判、紙裝、平綴百穂畫伯裝幀。
□活字は八ポイントを用ひました。
□約百頁を單位として星一つでそれを現はし、★一つ毎に二十錢の定價です。

□★一つを一に算へて此の文庫の番號を選めてゆきます。
□番號はただ發行順に從つて之を追ふものであります。
□★★或は★★★は、それぞれ二百頁或は三百頁の本一冊なることを示し、百頁ごつの分冊ではありません。
□定價(及び送料)は左表の通りです。

	定價	送料
★	二十錢	四錢
★★	四十錢	四錢
★★★	六十錢	四錢
★★★★	八十錢	六錢
★★★★★	一圓	六錢

□御註文は前金で御願ひ致します。小さい本で極度の廉價なのですから必ず送料はお添へ下さい。切手代用は一割増に編ひます。

最新刊書目

武道傳來記　西鶴作　和田萬吉校訂　★
論畫四種　叛崎坦譯　★
侏儒の言葉　芥川龍之介著　★
生ひ立ちの記(附幸生)　島崎藤村著　★
李太白詩選(上卷)　幸田露伴校閲　漆山又四郎譯註　★★
聖女ジョウン(ジャンヌ・ダルク)　シヨオ作　野上豐一郎譯　★★
幻想を追ふ女(他五篇)　森村豊譯　★★
ハーディ短篇集　森田・名原・浜口・小野・安藤・村山譯　★★
ゼイムズ　ユリシーズ(三)　ドーデー作　櫻田佐譯　★★
風車小屋だより
ヘルマンとドロテア　ゲーテ作　佐藤通次譯　★
幼年時代　トルストイ作　米川正夫譯　★★
少年時代　トルストイ作　米川正夫譯　★

最新刊書目

トルストイ民話集 人は何で生きるか（他四篇） 中村白葉譯★

トルストイ民話集 イワンの馬鹿（他八篇） 中村白葉譯★

永遠の良人 ドストイエフスキイ作 原久一郎譯★★

三人姉妹 チエーホフ作 米川正夫譯★

内村鑑三隨筆集 内村鑑三著★★

人生論 トルストイ著 中村白葉譯★★

エミイル（第四篇） ルソオ著 平林初之輔譯★

イエス ブッセ著 林達夫譯★

近刊書目

アルプスの氷河（主に科學的） チンダル著 矢島祐利譯★★

反デューリング論（下卷） エンゲルス著 長谷部文雄譯★★

劇聚 日本書紀（下卷） 鵜飼勝美編★★★

西鶴諸國咄 本朝櫻陰比事 西鶴作 和田萬吉校訂★

譯註 李太白詩選（下卷） 幸田露伴校閲 澤山又四郎譯註★★

ユリシーズ（四） ジョイス作 森田・他五名譯★★

人間機械論 ラ・メトリイ著 杉捷夫譯★

ファーブル 昆蟲記（二十分冊） 林達夫 山田吉彦譯★★

終